

ウンセリングを行ない母親の態度の変化を助けること、及び幼稚園での扱ひ方が大きく影響するように思われる。(大会抄録35—38頁)

中間児の研究

(成長と知能の変化)

愛育研究所 村山貞雄

西嶋淑子

若林昌

中間児の幼児期と児童期の知能指数にはどのような変化があるかを調べるため、幼児期に知能指数が七〇〜八九だった者三八名(♂二〇♀一八)について児童期に再検査を行なって、その関係を調べた。結果は抄録39頁第一表のようであるが、これによると、幼児期に中間児だった者は、成長による知能指数の変化が大きいがわかる。IQが一〇〇以上上った者が約四割(三九・五%)もあり、最高値一三八から最低値五九までの動きを示している。幼児期にIQが八〇台であった者に、特に変動の大きな者が多く、IQ一〇〇以上上った者は二八人中一三人もあり、幼児期、児童期を通して八〇台だった者は二人のみである。

これに対して、幼児期にIQ七〇台の者では、IQ六〇台以下に下った者が一〇人中四人おり、一〇〇以上上った者の割合は $\frac{1}{10}$ で、IQ八〇台程多くはなかった。結局幼児期に七〇〜八九のIQを示した者のうち、児童期になってもそのまま七〇〜八九のIQにあるものが少なく、特に幼児期に八〇台であった者はその後の変動が

大きかった上昇傾向がめだつ。しかし幼児期に七〇台であったものは、その後の変動がそれほどなく、むしろ下りぎみであるということが分つた。この結果から、幼稚園や保育所で知能検査をしてその指数が八〇台に出た場合、その解釈をよほど慎重にしなければならぬと思われた。

次に幼児期の問題内容として明らかにとらえられるものは、幼児期に知能検査を受けた時の主訴の内容である(抄録40頁第二表)。主訴の内容では、ことばの異常に関する主訴が多いが、この内容と知能指数の変動の関係を調べたところ、吃音発音不明僚の群と、口が遅い言語遅滞の群では再検査の結果のずれ方に、前群は上昇傾向・後群は下降傾向がみられた。

また主訴の内容が単なる知能検査や就園相談の場合は、そうでない者と比べて知能指数が大きく上っている者が多い。これに反して、主訴が知能遅滞の疑いの場合には知能指数がその後もあまり動かず、IQ一〇〇以上になっている者が少ない。幼児期に言語障害があつて、その時のテストの結果が低くなつた者などは別に、特別な障害もなかったのに、幼児期のテスト結果が低かつた者として就学・就園問題で来所した場合があげられるが、これらはその時期に家庭・幼稚園などの期待のかけすぎなどによって、子どもに必要な緊張を与えていたのではないかと想像され、今後これらの子どもに対する園での指導も考えなければならぬことではないかと思われる。

中間児のIQの変化と児童期の性格行動についての問題点。

中間児の知能を児童期に再検査した時、その児童の性格行動における特徴や問題点について父兄に話してもらい、特に指数の上つた者と下つた者について比較した。結果は(抄録41頁第三表)、

1、発表力と知能の変化

気が弱い・内弁慶・人前ではつきりものが言えない・人見知り・恥ずかしがるなど、テスト場面での発表力に関係がありそうな項目はあがったグループにも下ったグループにもみられた。

2、情緒と知能の変化

依頼心が強い・自発性に乏しいなどは、上った者二〇人中三人あるのに対し、下った者では五人中四人ともそうで、下がった者の方に多い。土九以内の変動組にも413みられるので、特に上がった者の方にこのような傾向が少ないともいえる。知識を広め自分の力を伸すのに、いかに依頼心が邪魔をしているかが分る。

その反面、自己主張が強い・自己中心的・わがまま という面のみられるのは、特に上った者のグループだけで320みられ、他には見られない。この性格はさかのぼって幼児期にもみられたとすれば、特に幼児期のテスト場面では、その課題に素直にのらず、持っている力を出さないということにもなりかねない。これと同じ傾向で、短気・粗暴・癩癩持ち・気が強い・怒りっぽい・乱暴・行動が悪いなどの面も、+のグループに1220みられ、目立つが-のグループにも25、土9のグループにも513とみられている。

3、知能の上昇と児童の問題点

動作が鈍い・遅いというのは、+のグループに520、土のグループには113みられ、-のグループにはみられない。なぜこれが+のグループに多くみられるのかは分らないが、動作の遅いというのがテスト場面で児童期では幼児期程には関係のないものになっていると考えられる。その他の神経質・臆病・心配症などがあげられているが、総じて上ったグループの現に困っているものの特徴は、行動・感情のげげしさ・自己中心的・着着きがないなどで ①少しの気

分の変化や条件に左右され易い幼児期のテスト結果が満足でなかった。②積極的に自分を表わすことよって日常生活における外界からの吸収が高かったこと。③テスト場面で引込みがちでなかったことなどが考えられる。

4 知能の下降と児童期の問題

その反対に、下った者のグループの現在困っていることの特徴は、依頼心が強い・自発性がない・神経質で臆病などが目立ち、これは外界からの知識の吸収においても消極的で、自分を充分に表わすこともやらないという面から、ますます下ってきているのではないかと考えられた。(大会抄録39-42頁)

精薄幼児のカリキュラム

愛育研究所

青木祥子
足立寿美
小林慶子

愛育研究所家庭指導グループの経験より

私達は精薄幼児一グループ七名を保育してきて、いつもどうしたらよいか、何をしたら子ども達が喜んでいくのか、もっているものを伸してやれるのか考えてきた。家庭指導グループとは家庭との連絡、家庭における子どもの指導を狙いたいと思いつけられたものである。幼児の生活は両親特に母親の膝で暮すわけであるから、子どもだけを切り離して三、四時間幼稚園の縮刷版のようにやっても効果がないので、母親も一しょに入って先生のやるところをみて貰うが環境に慣れた頃(一月後)当番制で二人ずつ先生の助